

# 牛久保の歴史をたずねて

## (1) 牛久保

### ① 地形

牛久保駅のすぐ南にがけがあります。校区の地形はこのがけを境に2つに分けることができます。がけの北側は「上郷」と呼ばれる台地で、佐奈川や白川などによって運ばれてきた土や石が厚く積もってできた土地です。水がしみこみやすい土地なので、雨水などはすぐに地下にしみこんでしまい、水にとぼしく、昔は農地や家が少ない荒れ地でした。地面にしみこんだ水は、このがけ下で泉となつてわき出ています。



上郷と下郷の間のがけ



がけ下の泉

がけの南側は「下郷」と呼ばれ、豊川が運んできた砂や土が積もってできた土地です。水が豊富で、土地も肥えているため農業がさかんです。

### ② 地名

もともとのこの牛久保の地は「宮島」と呼ばれていましたが、水にとぼしく、荒れ地が多いことから「常荒」とも呼ばれていました。

1439年、三河国守護(支配者)一色氏の一族である一色時家が、一色城(今の<sup>だいしょうじ</sup>大聖寺のあたり)を築いたので、この地は「一色」とよばれるようになりました。

その後、一色<sup>いっしきときいえ</sup>時家<sup>かしん</sup>は家臣<sup>は</sup>の波多野<sup>はたの</sup>全慶<sup>ぜんけい</sup>に敗れ、その波多野全慶も1493年に牧野<sup>まきのしげとき</sup>成時<sup>こはく</sup>（古白<sup>ほろ</sup>）に滅ぼされました。その成時が地名を「一色」から「牛窪<sup>うしくぼ</sup>」と変えました。1529年に現在の「牛久保<sup>げんざい</sup>」に改められました。

## 牧野<sup>さま</sup>様<sup>うしくぼ</sup>と牛窪

「豊川<sup>れきしさんぼ</sup>の歴史散歩」より

今から500年<sup>あま</sup>余り前の話である。牧野<sup>じょう</sup>城<sup>とのさま</sup>の殿様、牧野成時（古白）は、一色<sup>じょう</sup>に移り住むため、おとも<sup>うつ</sup>の者<sup>す</sup>たちを従<sup>したが</sup>えて、天王社<sup>てんのうしゃ</sup>の手洗<sup>あら</sup>い、金色<sup>こんじき</sup>清水<sup>しみず</sup>の窪溜<sup>くぼたま</sup>りの近くにさしかかった。すると、清水のかたわらに野飼いの牛が寝そべっており、往來<sup>おうらい</sup>の人々は皆<sup>みな</sup>、その牛をよけて通っていた。ところが、殿様が通りかかると、寝ていた牛がゆっくりと起き上がり、道をあけて殿様を通した。御案内のためお伴<sup>とも</sup>をしていた長山郷<sup>ながやまのごう</sup>の庄屋石黒九郎兵衛<sup>しょうやいしぐろくろべえ</sup>は、「これは、めでたいことの前兆<sup>ぜんちょう</sup>です。世のことわざのように、国主<sup>こくしゅ</sup>になられること疑<sup>うたが</sup>いありません。」と、申し上げた。殿様は、殊<sup>こと</sup>の外<sup>ほか</sup>喜<sup>よろこ</sup>ばれ、一色<sup>じょう</sup>城へ入られた。この時より、「一色・とこさぶ」の地を「牛窪」と改めた。その後、幾久<sup>いくひさ</sup>しく栄えるようにと現在の「牛久保」の地名になった。

野飼い：おりに入れない放し飼い　　庄屋：村の代表者（村長）

往來：行き来きすること、街道<sup>かいどう</sup>　　殊の外：とても

前兆：何かが起こる前のしるし　　幾久しく：いつまでも

## (2) 牧野氏のおこり

室町幕府4代将軍の命令により  
 田口成富が、四国の讃岐（香川県）  
 から応永年間（1394～1428年）に  
 宝飯郡中条郷牧野村（豊川市牧  
 野町）に移ってきて牧野城を築き  
 ました。この時に、田口氏が牧野  
 姓を名のったのが牧野氏のはじまりであるといわれていま  
 す。成富の子、牧野成時（古白）はしだいに力をつけ、1943  
 年に瀬木城を築きました。



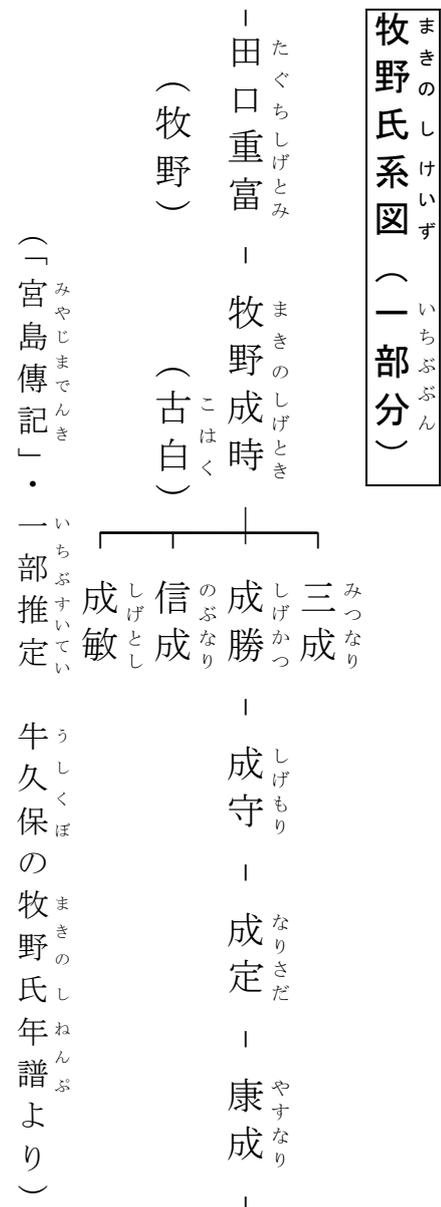
牧野城址



一色城址



瀬木城址



この年、成時（古白）は、一色城の波多野全慶を滅ぼし、一色城に本拠地を移しました。成時（古白）は、今川氏の家臣となり、1505年には今川氏の命令を受け、今橋（吉田）城を築き、今の豊川市のあたりに勢力をのばしていきました。

## ①牛久保城

牛久保城は、1529年に一色城主牧野成勝が今橋（吉田）城主牧野信成の命令を受けて築城したものです。この城は、牧野氏が、西三河の松平氏（後の徳川氏）に対抗するための重要な城でした。



牛久保城址

牛久保城は上郷の台地の端に造られた城で、南側は下郷の農業地帯で、城から見下ろすことができました。北側は二重



牛久保城の絵図

の堀がめぐらされていました。今の牛久保駅のあたりが本丸（城の中心）で、大手門（正門）が小学校の位置にあったと考えられています。城を取り囲むように武士の屋敷や町人の町並みをつくり、まわりに寺を配置して敵にそなえました。しかも、城に向かって直線になっている道路は一本もなく、必ず曲がり角のある道（曲尺手）になっています。このような町のつくりは、江戸時代の城下町を先取りしたものでした。

1600年、牛久保は<sup>てんりょう</sup>天領（<sup>とくがわぼくふ</sup>徳川幕府の<sup>りょうち</sup>領地）となりました。  
1700年に牛久保城は<sup>はいじょう</sup>廃城となり、取り壊<sup>こわ</sup>されてしまいました。

残念なことに、当時の城の<sup>しろ</sup>姿を<sup>すがた</sup>とどめるものは何も残っていません。ただ、牛久保駅周辺の<sup>しろあと</sup>城跡、<sup>おおて</sup>大手、<sup>しろした</sup>城下などの地名から、わずかに昔をしのぶことができます。

## ② <sup>わかばさい</sup>若葉祭（<sup>まつり</sup>うなごうじ祭）

<sup>ときわどおり</sup>常盤通にある牛久保<sup>はちまんしゃ</sup>八幡社の祭で、4月7・8日に近い土・日曜日におこなわれます。<sup>まきの</sup>牧野<sup>しげとき</sup>成時（<sup>こはく</sup>古白）が<sup>わかみやどの</sup>若宮殿（八幡社）にお参りをしていたときに、主君の<sup>いまがわし</sup>今川氏から<sup>よしだ</sup>吉田（<sup>とよはしし</sup>豊橋市）に<sup>ちくじょう</sup>築城するように命令されたことをよろこび、お祝いの酒を<sup>かしわ</sup>柏の<sup>さかずき</sup>葉を杯にして飲んだことから、「若葉祭」とよぶようになったと伝えられています。

また、ヤンヨウガミと呼ばれるはやし方がついていて、<sup>ささおど</sup>笹踊りの歌の終わりに「サーゲニモサー、

ヤンヨウガミモヤンヨー」とはやした後、4人一組のヤンヨウガミが、地面にねころびます。ねころんでいるようすが「う



牛久保<sup>はちまんしゃ</sup>八幡社



<sup>ささおど</sup>笹踊り

じ虫（<sup>おながうじ</sup>尾長蛆）」ににていることから「うなごうじ祭」とも呼ばれています。

祭の<sup>きげん</sup>起源について、次によろなことが伝えられています。



ヤンヨウガミ

わかばさい まきのさま  
若葉祭と牧野様

れきしさんぽ  
「豊川の歴史散歩」より

戦国時代、牧野<sup>こはく</sup>古白を始めとする牛久保城の城主は、<sup>じょうしゅ</sup>領民をことのほか大切にしていた。ある時、日ごろの苦<sup>りょうみん</sup>勞をねぎらうため、領民を<sup>じょうちゆう</sup>城中に召して酒食<sup>め しゅじょく</sup>を振る舞った。領民たちは、城主の振る舞い酒にすっかり<sup>よ</sup>酔い、まっすぐに歩いて帰ることもできず、ごろごろと転がりながら<sup>たが</sup>互いに助け合って帰ったということであった。その様子を伝えているのが「やんよう神」であり、この時の喜びを<sup>しんじ</sup>神事に<sup>も</sup>盛り込み、<sup>こ</sup>領主の<sup>りょうしゅ</sup>善政<sup>ぜんせい</sup>を<sup>わす</sup>忘れない領民の心を今に伝えているのが、若葉祭（うなごうじ祭）である。

領民：<sup>りょうちない</sup>領地内に住んでいる人

召す：よびよせる

酒食：酒と食事

神事：お祭りの行事

領主：領地を治めている人

善政：良い<sup>せいじ</sup>政治

### (3) 江戸時代の牧野氏

今川義元いまがわよしもとの死後しご、牧野成定まきのなりさだは1566年に松平家康まつだいらいえやす（後の徳川家康とくがわいえやす）の家臣かしんになり、その子の康成やすなりは、家康の有能な武将ゆうのうぶしょうとして活躍かつやくしました。

1590年、徳川家康が江戸へ移ったのに従い、牧野康成も上州大胡しゅうおおご（群馬県前橋市・2万石）へ移ることになりました。その後1616年には越後長峰城主えちごながみねじょうしゅ（新潟県上越市・5万石）となり、1618年に越後長岡えちごながおか（新潟県長岡市・7万4千石）に移りました。その後、長岡藩主ながおかはんしゅとして幕末まで長岡の地を治めました。

長岡に入った牧野氏は、新田開発を進めたり、新潟港を整備びしたりして藩が豊かになるように努力しました。

また、藩校・崇徳館そうとくかんをつくり、武士の子どもの教育にも力をそそぎました。

分家ぶんけは、信州小諸藩しんしゅうこもろはん（長野県小諸市）、常陸笠間藩ひたちかさまはん（茨城県笠間市）、越後三根山藩えちごみねやまはん（新潟県新潟市）などがありました。

牧野氏は譜代大名ふだいだいみょう（徳川氏に古くから仕えていた大名）であり、老中などの重要な役につくことも多く、江戸幕府の政治せいじに深く関わりました。

#### ① 参州牛久保之壁書さんしゅううしくぼのかべがき

長岡の牧野氏には、参州牛久保さんしゅううしくぼ（豊川市牛久保町）で育てられた常在戦場じょうざいせんじょうと質実剛健しつじつごうけんの三河武士みかわぶしの精神せいしんが生きていました。それをあらわすものが「参州牛久保之壁書」です。また分家にあたる三根山藩、小諸藩にもこの「参州牛久保之壁書」は伝えられています。

## ② 北越戊辰戦争と河井継之助

1868年(明治元年)の明治維新の時、  
長岡藩は新政府・幕府のどちらにもつ  
かない中立の立場をとっていました。

しかし、新政府は長岡藩をうたがい、  
攻めこむ考えでいました。長岡藩の  
軍事総督(軍隊の指揮官)だった河井  
継之助は、小千谷で新政府軍の指揮官  
岩村精一郎と会談(小千谷談判)しま  
した。継之助は、「新政府に、はむか  
う考えはない。」と説得しましたが、



河井継之助  
長岡市中央図書館より

岩村は聞き入れず、会談は失敗しました。その結果北越戊辰  
戦争が起きました。

当初、長岡藩が戦いを有利に進めましたが、人数や武器で勝  
っている新政府軍におされ始めました。継之助も先頭に立っ  
て戦いましたが、長岡城を落とされてしまいました。その後、  
継之助は八丁沖というぬかるみ地から攻める作戦で、長岡城  
を取り返すことに成功しました。しかし、少ない兵力の長岡  
藩は、戦争に負けてしまいました。継之助は重傷を負い、そ  
の傷がもとで亡くなりました。

戦争の結果、長岡の町は火の海となり、約3000軒あった建物の  
うち約2600軒が焼けてしまいました。また、田んぼや畑が  
あらされ、食べ物が収穫できない有様でした。長岡藩の人々  
は、苦しい生活を送らなければならなくなったのです。

## ③ 米百俵と小林虎三郎

戦いの後、くらしに困っていた長岡の藩士(藩の武士)に  
親せきの三根山藩から百俵の米がおくられました。藩士たち

は、これで生活が少しでも楽になると喜びましたが、藩の<sup>だい</sup>大参事<sup>さんじ</sup>（今の<sup>けんちじ</sup>県知事）である小林虎三郎は、おくられた米を藩士に分けずに売りはらい、学校<sup>せつりつ</sup>設立の<sup>ひよう</sup>費用にすることにしました。藩士たちはこの知らせに<sup>おどろ</sup>驚き、虎三郎のもとへと押しかけ<sup>こうぎ</sup>抗議をしました。それに対し虎三郎は、「常在戦場」の掛け軸を背に、

「さて、おのおのがた。そのもとたちも、この<sup>か</sup>掛け<sup>じく</sup>軸の<sup>も</sup>文字『<sup>じょうざいせんじょう</sup>常在戦場』は、よもお<sup>わす</sup>忘れはござるまい。これを知らぬ者は、ここには一人もおらぬはずだ。『<sup>つね</sup>常に<sup>せんじょう</sup>戦場に<sup>あ</sup>在り』この文字、この言葉は、<sup>とうはん</sup>当藩の<sup>もの</sup>者である<sup>かぎ</sup>限り、もの<sup>ごころ</sup>心づく<sup>どうじ</sup>と同時に、<sup>かなら</sup>必ず<sup>め</sup>目にし、<sup>みみ</sup>耳にし、<sup>くち</sup>口にして<sup>おどろ</sup>いるところのものだ。申すまでもなく、これは<sup>さんしゅううしく</sup>参州牛久保の<sup>かべがき</sup>おん壁書だ。その<sup>かべがき</sup>壁書のうちの、<sup>だいいちじょう</sup>第一条の<sup>も</sup>文字だ。ご<sup>とうけ</sup>当家が<sup>とうながおか</sup>当長岡にお<sup>くに</sup>国替えになったのちも、この<sup>さだ</sup>お定めは、<sup>さんしゅう</sup>参州以来の<sup>いらい</sup>ご家風として、<sup>かふう</sup>三百年<sup>さんびやくねん</sup>来、とりわけ<sup>おも</sup>重いおきてと<sup>おも</sup>されているところのものだ。・・・」

（戯曲「米百俵」山本有三より）

と<sup>い</sup>言い、<sup>くる</sup>苦しいときだからこそ、<sup>こ</sup>学校を建て<sup>こ</sup>ること、<sup>こ</sup>子どもたちを<sup>きょういく</sup>教育することが<sup>ひつよう</sup>必要だと<sup>と</sup>説いたそうです。



平成 24 年度 学習発表会 6 年生「米百俵」

この米百俵を売ったお金によってできたのが「<sup>こっかんがっこう</sup>国漢学校」です。この学校では、<sup>こくがく</sup>国学（日本古来からの学問）・<sup>かんがく</sup>漢学（中国の学問）・<sup>ようがく</sup>洋学（西洋の学問）・<sup>いがく</sup>医学（病気についての学問）・<sup>へいがく</sup>兵学（戦いについての学問）などの授業がおこなわれました。

その後、この国漢学校は<sup>ながおかしりつさかの</sup>長岡市立<sup>うえしやうがっこう</sup>阪之上小学校に引き継が

れました。この学校からは、海軍大将山本五十六をはじめ、日本を代表する多くの人物が育っています。

このことは、山本有三の戯曲「米百俵」に詳しく書かれています。

### 小林虎三郎 (1828年～1877年)

長岡藩 (新潟県長岡市) の藩士・小林又兵衛の子として生まれる。又兵衛は、藩校・崇徳館で学問を教えるほど学問がある人だった。虎三郎もとても勉強ができ、藩校の先生を務めるほどだった。

23才の時に江戸 (東京) に行き、当時の最新の学問を教える佐久間象山の塾で学問を深めた。

明治維新の時には長岡藩の人々に、新政府軍との戦いをやめるように主張するが、聞き入れられることはなかった。

新政府軍との戦いの後、1868年 (明治元年) に焼け野原になった長岡藩の大参事 (今の県知事) になる。三根山藩からの米百俵をお金にかえ、国漢学校をつくり、人々の教育にあたった。



小林虎三郎  
興国寺より

藩校：各地の藩が藩士のためにつくった学校

佐久間象山：江戸時代後期の科学者

明治維新：江戸幕府がたおれ、新しい日本にかわったこと

新政府軍：明治時代のはじめに薩摩藩 (鹿児島県) と

長州藩 (山口県) を中心につくられた軍隊

## (4) 校区の古いもの探し

### ① 今川義元の胴塚（大聖寺）

大聖寺境内の北西のすみに、石のさくで囲まれて建っている墓が今川義元の胴塚です。墓は台石に横にたおした手水鉢を使っていて、めずらしい形になっています。高さも2 mを超え、義元胴塚の名にふさわしい堂々としたものです。

今川義元とはどんな人だったのでしょうか。

今川義元は、戦国時代に駿河（静岡県東部）、遠江（静岡県西部）だけでなく、牧野氏を家臣にして、東三河も治めていました。

1560年、義元は、駿河・遠江・三河の兵4万5千を率いて、尾張をめざして進撃しましたが、桶狭間で織田信長の奇襲をうけて、あえない最期を遂げてしまいました。家臣たちは、首のない義元の遺体を背負い、駿河まで持ち帰る途中、かろうじて今川氏の勢力下の牛久保にたどり着くことができました。そこで、大聖寺の境内に義元の遺体を葬り、手水鉢をその上に置き、目印としました。これがもとで胴塚とよばれています。3年後にその子の氏真は義元の三周忌を大聖寺で営みました。



今川義元の胴塚



今川義元

## ② <sup>やまもとかんすけ</sup>山本勘助の<sup>いはつづか</sup>遺髪塚（<sup>ちょうこくじ</sup>長谷寺）

寺町にある長谷寺に山本勘助のお墓（遺髪塚）があり、勘助が大事にしていた<sup>まりしてんぞう</sup>摩利支天像が残されています。

山本勘助とはどんな人だったのでしょうか。

山本勘助は1500年、<sup>やなぐんかもむら</sup>八名郡賀茂村（<sup>やまもととうしちろうみつゆき</sup>豊橋市賀茂町）の山本<sup>やまもと</sup>藤七郎<sup>ふじやう</sup>光幸の三男として生まれました。

15才になった勘助は、<sup>まきのし</sup>牧野氏の家臣である<sup>おおばやし かんざえもん</sup>大林勘左衛門の<sup>ようし</sup>養子になりました。そのため、名前を「<sup>おおばやし かんすけ さいだゆき</sup>大林勘助貞幸」と改めました。大林家の<sup>やしき</sup>屋敷は、今の寺町公園付近にあり、<sup>きねんひ</sup>記念碑が立っています。

25才になった勘助は、<sup>むしや</sup>武者修行に出かけました。

勘助はまず<sup>きしゅう</sup>紀州の<sup>こうやさん</sup>高野山に登り、<sup>どう</sup>摩利支天堂にお参りして<sup>ぶげい</sup>武芸の上達を<sup>きがん</sup>祈願しました。そして、<sup>こうぼうだいしきく</sup>弘法大師作といわれる一寸三分（約4cm）ほどの<sup>れいけん</sup>靈験ある摩利支天像をいただくことができました。勘助はこの仏像をえりにかけてお守りにし、各地の有力な大名のところをまわり家臣になりました。修行の間に全身に75か所の<sup>きず</sup>傷を負ったと伝えられています。その途中、勘助は大林勘左衛門と親子の<sup>えん</sup>縁を切り、名前をもとの「山本勘助貞幸」に<sup>もど</sup>戻しました。最後に<sup>かい</sup>甲斐の<sup>たけだしんげん</sup>武田信玄に<sup>つかえ</sup>仕え



<sup>やまもとかんすけ</sup>山本勘助の<sup>いはつづか</sup>遺髪塚



<sup>おおばやし かんざえもん やしきあと</sup>大林勘左衛門屋敷跡

ることになりました。甲斐に出かける前に勘助は、以前から親しくしていた長谷寺の念宗和尚に会いに行き、自分の髪とお守りの摩利支天像を預けました。



摩利支天像

勘助は軍略にすぐれ、城を築く方法もよく知っていたので、武田信玄は勘助のことを大切にしました。勘助も「風林火山」の旗のもと熱心に仕え、武田軍の有力武士である二十四将の一人になっていきました。このように、武田氏の家臣として活躍しましたが、61才の時に戦死してしまいました。

勘助が戦死したことを聞いた長谷寺の念宗和尚は、勘助の遺髪を埋めて墓を建て、ねんごろに供養しました。これが長谷寺に伝わる山本勘助の墓（遺髪塚）と摩利支天像です。

なお、越後長岡藩の家老だった山本家を継いだ海軍大将山本五十六は、山本勘助と同じ家系の人物であるとして伝えられています。

## 風林火山と武田信玄

「風林火山」の旗とは、武田信玄の戦いに対する考えをあらわした旗です。

全文は「疾如風、徐如林、侵掠如火、不動如山」です。

読み方は「疾きこと風の如く、徐かなること林の如し、侵略すること火の如く、動かざること山の如し」です。

### ③牛久保いもと河合喜八<sup>かわいきはち</sup>

下長山<sup>じょうぜんじ</sup>の上善寺に河合喜八のお墓があります。河合喜八とはどんな人でしょうか。

河合喜八は、今から200年ほど前に牛久保ではじめてサツマイモを育てた人です。自分で育てるだけでなく、まわりの人にもその育て方をひろめたので、そのサツマイモは「牛久保いも」とよばれました。この地方の特産物として、浜松や名古屋にまで出荷<sup>しゅっか</sup>されました。

#### 牛久保いもと河合喜八

「豊川<sup>れきしさんぼ</sup>の歴史散歩」より

牛久保に河合喜八という人がいた。喜八は農家の生まれだが、成長<sup>せいちよう</sup>するに従<sup>したが</sup>い、仏教を信仰<sup>しんこう</sup>するようになった。

諸国<sup>しょこく</sup>の霊場<sup>れいじよう</sup>を順拝<sup>じゆんぱい</sup>することを楽しみ、ついに文化<sup>ぶんか</sup>5年（1808年）薩摩<sup>さつま</sup>（鹿児島<sup>かごしまけん</sup>県）に入った。そこで、ある農家の老人が出してくれたサツマイモに出会った。味わえば風味よく、聞けば日照<sup>ひで</sup>りでも不作がないという。米や麦の代用として、飢饉<sup>ききん</sup>のときに備えて、これに勝<sup>まさ</sup>るものはあるまいと思った。

喜八は、ねんごろにお願いして、3個のサツマイモをやっとわけていただいた。作り方も教えてもらって、翌年<sup>よく</sup>牛久保に帰った。年々、これを栽培<sup>さいばい</sup>して増殖<sup>ぞうしょく</sup>につとめ、各地にひろめた。こうして牛久保を中心に栽培されたので、「牛久保いも」といわれた。